七万世帯より多い。これから見ても、クロスカントリーの方が主流といってよい。

まず手軽なのがよい。隣の公園に散歩に出掛けるようなものだ。郊外にはいくつかクロスカントリー用のトレールが用意されている。軽いサンドイッチなどをサックに入れて、真白い平原を家族そろって行進するのは実に壮快だ。新雪をかき分けながら十分も滑れば、汗が吹き出してくる。ここで熱いコーヒーよし、雪で割った冷たいジュースよし、この上ない解放感を味わえること間違いなしだ。晴天の日は小さな子供でも安全で短いコースなら参加できるし、ベテランのリーダーがつけば、雪原で野宿する長距離コースも楽しめる。質素で合理主義のカナディアンにはもってこいのウィンター・スポーツで、雪上のジョギングと考えればぴったりくる。

周知のごとく、カナダは湖の国でもある。オンタリオ州はなかでも無数の湖が散在している。そこで釣りファンの楽しみのひとつがアイスフィッシングだ。トロントから北へ車で一時間も走れば、巨大な湖、シンコー湖がある。真冬になると、湖水表面には厚さ三十センチほどの氷が張る。氷上には、いたるところに「ハット」と呼ばれる釣り小屋（有料）が立ち、この中でホワイト・フィッシュなど、湖の主に挑戦する。氷を四角く切り取った小屋の床面に釣り糸を垂れれば、あとは魚まかせ。ウイスキーでもちびりながら、のんびり談笑していればよい。小屋の中はガスストーブで暖房してあるから、昼寝だってできる。

ウィンタースポーツはなにも戸外だけではない。ちょっとしたアパートなら、地下にはプール、スカッシュ、アスレチック・ジムが備わっている。忙しいサラリーマンも、帰宅後ひと泳ぎして、運動不足解消を図るなどは日常的だ。人気が高いのはテニスだ。テニスは夏のスポーツと考えるのは大間違いで、むしろ夏の間ゴルフに明け暮れている人にとっては、冬はテニス・シーズンとなる。もちろん室内テニスだが、会員制で施設もしっかりしている。早朝から夜遅くまでオープンしており、都合のよい時間を予約しておけば待ち時間なしでプレーできる。日本企業駐在員にもテニス・ファンが多く、週末ともなると必らず姿を見かける。

カナダの冬は、二月以降が〝正念場〟だ。三月の声を聞けば春めいてくる日本と違い、その先はまだ長い。カナダの冬を四～五回体験すれば気も長くなり、カナダの生活ペースに慣れてくる。

冬のレジャーとスポーツ

北極の寒さは別として、零下十度や二十度ぐらいなら、大方のカナダ人は家の中に閉じ込もってなどいない。大人も子供もさまざまなウィンター・スポーツや遊びに打ち興じ、各地では冬のスポーツ・フェスティバルがくり広げられる。

例えば、オタワのリドー運河で開かれる「冬の祭典」（ウィンタールード）。毎年二月、十二日間にわたって行なわれるこの祭典は、雪と氷の国ならではの冬の一大スポーツ・イベントだ。

四十チームが参加するリドーカップ・アイスホッケー・トーナメント、創意に満ちた三輪車競争、スケートで飲み物をこぼさずに運ぶバーテンダー競争、四十キロ・スピード・スケート・レース、戸外では北米唯一のカーリング試合、十六個の樽を跳び越える樽跳び競争、走破には一泊必要の世界最長距離（百十キロ）クロスカントリー（「カナディアン・スキー・マラソン」）、サイレンや旗で飾りたてた病院のベッドにスケートをはかせたベッド・レース、イロクォイ族インディアンに伝わる難しいスノースネーク競争、歴史を偲ばせる氷上馬車競争、かんじき競争――と、種目は多彩で、国内外からつめかけた何万という観衆を熱狂させる。

国技といわれるアイスホッケーは、カナダで観戦人口が最も多いスポーツだ。冬になると路上ににわかプレーヤーが続々と出てくる。子供たちも、スケートを上手にすべる五、六歳になると、ちょっとした広場で大人のコーチを受けながらプレーし始める。母親や近所の人たちも応援にかけつけ、ちょっとした騒ぎになる。

家族で楽しむものにスケートやスキーがある。とくにスキーは最近、クロスカントリーが自然と親しめる雄大なスポーツとして人気が高まっている。雪に埋もれた畑や牧場、近くの自然公園を走る手近かなコースから、数日、数週間をかけて走破する本格的なコースなど、参加者の都合や技術に応じてコースが整備されてきた。

雪上をぶっ飛ばすスノーモビルは、今や冬のファッション・スポーツ。専用のコースが町なかや国立・州立公園に作られ、競技大会も頻繁に行なわれている。マニトバ州では地域一帯の自然生態を説明するガイドつきのスノーモビル・サファリに人気が集まり、また広大なコースの各地点でトランプの札を集めるスノーモビル・ポーカーゲームも出現した。

スノーモビル乗りを楽しむ人々。